

「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（連携型）」
清流の国 輝くギフジョ 支援プロジェクト

連続フォーラム
『女性が輝く岐阜』に向けての女子大学の役割：
女性研究者『地方』で研究を続けるには

第2回 「取材で出会った人々」



【講 師】

箕浦 由美子 氏（岐阜新聞生活文化部部長）

実施日：平成28年11月10日（木）

場 所：岐阜女子大学 本館3階 大会議室

司会（三宅） それでは、時間になりましたので始めさせていただきます。「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（連携型）、清流の国輝くギフジョ支援プロジェクト連続フォーラム、『女性が輝く岐阜』に向けての女子大学の役割：女性研究者『地方』で研究を続けるには」の第2回でございます。

皆さんもご記憶にあると思いますが、昨年に第1回をおこないました。松川教育長に来ていただきました。第2回は、岐阜新聞生活文化部部長の箕浦由美子さまに来ていただきました。箕浦さん、どうぞよろしくお願いいたします。

○箕浦 よろしく願いいたします。

○司会 第1回目では、まだ「ダイバーシティ」という言葉も私のなかではよくわからない言葉でしたので、「フジテレビがお台場に新しい町をつくったんじゃないか」とか、「潜水夫の町が新しくできるのか」というような、よくわからない発言をしておりましたが、この1年の間に、「ダイバーシティ」という言葉も世間に浸透してきていると思います。

本学や連携する大学、企業だけでなく、世間的にもいろいろなところで「ダイバーシティ」という言葉を聞くようになりました。残念ながらアメリカの大統領は女性にはなりませんでしたが、世界的にも「ダイバーシティ」ということがいろいろ言われるようになってきたと思います。

また、「ダイバーシティ」という言葉が、あちこちで言われるようになってきますと、それは多様性ということですので、女性だけが対象となるのではなく、高齢者や障害者、先日のリーダーシップ研修会の講師、早川信夫先生のお言葉をお借りすれば、弱者をどのように理解していくかが大事だということも言われるようになってきました。

したがって、「ダイバーシティ」を受け入れることは、プラス面だけではなく、当然、マイナス面もあるわけですので、手放しに「ダイバーシティ」で万歳と言っているわけにはいかないだろうと思います。今回は箕浦さんから何かヒントを伺えればと思っております。

箕浦さんは、研究者ではございません。私たちは、研究者仲間の狭い範囲での考え方しかできませんので、箕浦さんが取材で得た知識や経験をもとにアドバイスをいただければありがたいと思っております。

全体の構成は、三部構成にしようと思っております。レジュメをご覧くださいとおわかりになると思いますが、箕浦さんご家庭を持ちながら、夜遅くまで新聞社で働いていらっしゃいますので、まずは箕浦さん自身が仕事を通じて考えられたこととお話しいたします。2番目には、岐阜新聞にお勤めですので、企業で働く女性がどのような生活を送って、どのような一生を送っているのか、そのあたりのお話をさせていただきます。そして、3番目には、京都大学の副学長を務められた方でしょうか、養老のご出身だと伺っていますが、女性研究者の代表者として稲葉カヨさんの記事が岐阜新聞にございましたので、それについて少しお話しただこうと思っております。

皆さんのお手元に配布した資料の右下にポストイットが貼ってありますが、質問がありましたら、これに書いていただければと思います。時間的に全てにお答えできるかどうかわかりませんが、「ご質問はありませんか。挙手をしてください」と言っても、なかなか手を挙げていただけないので。もう國定さんはさっそく書いていらっしゃいますが、ポストイットであればと思いますので、ぜひお寄せいただきたいと思います。

では、最初に箕浦さんと私が出会ったあたりの話をさせていただこうと思っております。私の個人的なことなので、申し上げるのは憚られるのですが、せっかく箕浦さんとお話しさせていただくということですから、20年前に、箕浦さんが私の家庭を取材してくださった話をさせていただきたいと思っております。

箕浦さん、そのときの状況をまずお話しただけですでしょうか。

○箕浦 はじめまして、岐阜新聞生活文化部の箕浦と申します。今日はよろしくお願いいたします。

外に出て取材する機会も多いですので、入社して26年、入社当時からこちらへも何度も寄せていただいています。日ごろ、取材をさせていただく先生方のお話をさせていただくのは非常に緊張しますが、「外からの目で」ということで機会をいただきましたので、よろしくお願いいたします。

三宅先生との出会いですが、1996年6月6日の記事になります。お手元に配布してあります「漂流する心 ぎふ幸せ探し」という連載の第1回として取材をお願いしました。

1996年といいますと、私も入社して6年目ぐらいで、まだ独身でした。当時、バブルがはじけた後でした。「行け行けどんどん」ということで、社会に進出して活躍することがいいという今までの価値観が少し揺らいで、田舎暮らしもいいのではないかと、DINKs (Double Income No Kids: ディンクス) でいくのもいいのではないかと。そう言いながら、子どものいじめや不登校という問題やDV (ドメスティック・バイオレンス) の問題が顕在化してきたりして、今までの勢いでいいのかという社会情勢のなかで、岐阜にいる皆さんもいろいろな選択をしながら、自分の生き方を見直している、新しい行動を始めているという問題意識から、年間を通して扱った企画です。

3人の記者で担当しまして、1月1日から7月まで断続的におこなった100回の企画のなかの20回ずつ、第2部と第4部を私が担当しました。

第2部では、「追い詰められた子ども」というタイトルで、当時の子どもの問題を取り上げました。第4部で、三宅先生取材させていただきました。「新・家族のきずな」というサブタイトルで、家庭のかたち、特に出産や女性の仕事の仕方など、従来の価値観を見直しながら新しいことを始めたり、今はとられなくなった方法を、もう一度、自分で選んでみたり、いろいろなことをやっている方々に話を聞きに行ったなかの第1回です。

三宅先生の回については、自宅出産をした方がいらっしゃるという話を、助産婦さんの関係か何かからご紹介いただきました。当時、自分も産んだことなくわからないなかで、どのような思いでいらっしゃるのかという話を聞きに伺ったときの印象が非常に強くて、その後も、研究者としても、女性の先輩としても、大変勉強させていただきました。久しぶりにお会いしたというようなところもあります。

三宅先生は、一人目が帝王切開で、二人目のときに自然出産したいということで、助産婦さんの助けを借りながら、ご自分の体質改善から何からいろいろ努力をして自宅で産むことにしたということです。そのときに、ご家族はいろいろ心配されたり、いざというときの態勢を考えたりするなかで、一人目のときのように病院へ行くのではなく、自宅で出産することで、生まれた家族の軋轢や話し合いなど、やってみてわかったこと、これが正解というものがないなかで、いろいろと迷い、話し合いしながら見つけられた答え、その上での絆といいますか、「ああ、こうやって家族はできていくんだな」と非常に感動しました。

この企画自体、当時のデスクに「社会面でやるのに、こういう内容でいいのか？」ということをおまながら、「おまえが結婚するための準備の企画だろう」と冷やかされながらやりました。二十何年やってきたなかで、今も自分にとって非常に大事な経験だったと思っております。

○司会 ありがとうございます。今、箕浦さんがおっしゃったことは必ずしもそうでもありません。この写真に見られるような絵に描いたような幸せな家族というわけでもなく、結構、反対といいますか、軋轢はありました。夫がここでニコニコとしていますが、言葉では辛辣なことも言っています。

ただ、おかげさまで、いろいろな方の力を借りて続けてこられたことは、本当にありがたいことだと思います。本学でも、ご家族でいろいろな課題を抱えながら仕事を続けている方はたくさんいらっしゃると思いますが、他からの助けによって、やっと成り立っているだけだと思っています。

さて、箕浦さんとのなれ初めを少し話させていただきました。「漂流する心 ぎふ幸せ探し」ということで、他にも取材をされていたので、ここからはその話を伺えますでしょうか。

○箕浦 もう一つ、二つ、印象的な例を話させていただきます。横山悦生先生という方で、当時は岐阜大学の助教授で、今は名古屋大学に移られたそうです。20年以上前に、美濃市で学童保育を開設する運動に、ご夫婦で関わられた方です。

今は学童保育もずいぶん進みましたので、ない学校のほうが少ないぐらいの状況だと思います。当時、三世代同居の多い地域で、学童保育の需要がなかったこともありまして、はじめは「子どもの放課後の

過ごし方を考える会」というような親同士の勉強会からスタートしました。市との交渉ですとか、どのようなかたちがふさわしいかということ、仲間のつながりのなかでアクションを起こしてやっていかれました。

当時、そういう運動としては、かなり遅い時期だったのかもしれませんが。それまでにも、仲間のつながりによって子育ての環境を変えていき、家庭と仕事の成り立ちをよくしていこうということを実施されている方がいろいろといらっしまったこともわかりまして、自分で考えて行動を起こす大切さを知りました。

奥さまも仕事を断念するかというところで悩んだときに、やりたくてもやれない人が多いなかで、「せっかくやれるチャンスがあるのだから」と励まされて続けることができましたということでした。

先ほど、三宅先生もおっしゃいましたが、身近な人のエンパワーメントといいますか、声掛けの大切さも実感したところですよ。

○司会 この記事を書かれたのは1996年で、当時は、既に岐阜市では約9割に学童保育があり、しかも大垣市では100%ということですね。

○箕浦 はい、そうですね。

○司会 そのころ、美濃市には全くなかったと。

○箕浦 はい。

○司会 そのあたりのことは何かお感じになりましたか。

○箕浦 人の運動によってできるものといいますか、需要のないところに、勝手に整えてくれることはないという行政の成り立ちの順番みたいなものがあります。

私も子どもを預けるときに調べたのですが、会社の近くで19時まで預かってくれる保育所がやっとできたところでした。また、すぐ近くの岐阜大学の医学部には、内部の方だけが利用できる保育所があって、そこへ外から入れていただくことも、状況によっては可能という時代だったと思います。

○司会 それから、もう一つ古川さんの件です。

○箕浦 これも個人的な行動とリンクしますが、当時、私が10年ぶりぐらいに女性の正社員として採用されたことを聞きつけた他社の女性記者の集まりがありまして、「働くからには、こういう心構えでやりなさい」ということをいろいろ教えていただく機会がありました。

古川（芳子）さんは女性学の先生で、女性がどのような変遷で今に至るかということ、社会との関わりをなかで捉えるべきだという研究をしていらっしゃる方でした。この企画のまとめとして、あらためてインタビューをしたなかで、当時、子育ての話を中心に聞いたのですが、女性の子育ては生産であったり、その地域の活動であったり、家事であったり、いろいろとおこなわれていた役割のなかの一つであったと。近代になって生産性が上がり、男性が長時間労働をして、それを支える専業主婦という立場の人が生まれました。そこで子育てが女性だけのものになり、子育てで女性の自己実現というか、価値がはかれるようになったという流れのなかで考えるときに、子育てだけで女性が評価されるというような価値は一時的なものであって、歴史的に見れば恒久的なものではないということを強調されていました。

また、20年が経過していますから、当時と今では状況は変わりますが、社会に出て働いたほうがよいということだったり、自己実現のためにすべきことも、全て社会の価値観の投影であって、それをよいと思うかどうかは自分で判断すべきではないかと。何といいますか、社会がこうあるべきだと思うことが、決して自明のものではなく、社会の今の状況の要請によって出来上がっている部分があるので、それをそのまま受け入れるのではなくて、自分のなかに一度落とし込んだ上で、どのように生きていくのかということ、それぞれが考えて選ぶことができる。そのために、周りの人と折衝したり、やり方を工夫したりすることをもっと考えていきましょうという励ましをいただきました。

○司会 当時、今もかもしれませんが、古川先生は中部女子短期大学（現：中部学院大学短期大学部）の教員でいらっしまったのですね。

○箕浦 今は、籍は移っておられます。

○司会 そうですか。そのお話によると、繰り返しになりますが、昭和30年代以降の高度経済成長にともない、効率化のためにとられた一つ的手段として、女性が他の仕事をするのではなく家事に専念して、男が外で働いたほうが効率がよいのではないかといわれたということですね。ですから、当時としては、外で働かずに、子育てに専念できることは歓迎すべきことだという状況もあったということですね。

○箕浦 そうですね、はい。

○司会 ありがとうございます。20年ほど前に、箕浦さんが「漂流する心」という記事を書かれたときのお話を伺いました。

それでは、ここから第二部に入らせていただきます。岐阜新聞社で働く女性たちの様子、そのあたりをお話しいただけますでしょうか。

○箕浦 「地方で女性研究者が活躍できるように」という大きなテーマのなかで、私の何がお役に立てるのだろうかと思いましたが、岐阜という地域で、女性が働く例として何か参考になるところがあるかもしれないと考えました。

記者という職業は、わりと女性に人気があります。このところ採用の2分の1から3分の1が、私どもの女性社員の中ではかなりの部分を占めています。社員全体のなかでは女性は14パーセントしかいませんが、編集局のなかでは女性記者は現在17名です。定年を迎えるに至った70歳ぐらいの方をはじめ、正社員としてずっと会社で記者をやっていたという人が続いています。現場では、私が一番年長ぐらいですが、「男女雇用機会均等法」の恩恵もありまして、私の下には新入社員の子まで採用が続いています。私は「男女雇用機会均等法」の後に正社員として採用された第一世代にあたりますので、警察の担当で夜勤があるとか、県内で引っ越しがあるとか、一人で支局に住むとか、少し特殊な仕事場だと思っています。

記者という仕事は、勤務形態や勤務場所、勤務内容もさまざまなパターンがあり得るということ。先ほどの取材のように、自分たちが仕事の上で動いている実例の話聞きに行くことができるという特権もあります。その部分で、周りの影響を受けやすいといいますか、「ああ、こんなことができていの方がいるんだ」ということをご紹介すると同時に、自分も感化されて、「今の状況でも頑張ればできるんじゃないのか」という気づきを与えてもらえることも、少し特殊な仕事なのではないかと思っております。

先輩も含めて、実例を幾つか出したいのですが、よろしいですか。

○司会 はい、順番にお願いします。

○箕浦 今、60歳代半ばで、正社員で二人の子どもを産んで育休をとった方です。40年前に、1年間の育休を取ることができる制度をつかった会社でして、当時は非常に進んでいたということを私たちも聞きました。組合運動などで働く環境を整えるべきだという流れがあったというところでも非常に貴重なことでした。

この60歳代半ばの方の夫は同僚の記者でしたので、家事分担や仕事の仕方、交渉しながら頑張る姿を目の前で見えてきました。しかし、仕事の機会としては、いろいろなところには回してもらえず、当時は生活文化部の記者もやりましたし、調査部ですとか、縁の下の力持ち的な、引っ越しのない、夜勤のない職場でやってきた方が第一世代になります。

次に、現在60歳になった先輩は、「男女雇用機会均等法」の前ではありますが、男女に同じ仕事を回そうという流れができてきたころでしたので、多治見市や関市などの複数の記者を置く総局の2階に住みながら子育てをしたという人です。夫が同僚だったのですが、違うところに住んでいましたので、家族を頼ることがなかなかできず、自分で保育所の送り迎えもしていました。

子どもが小学校に入ったころには、子どもが総局の事務所にいる人に「ただいま」と言って帰ってきて、2階の部屋に行く。お母さんは下で仕事をしていると。そうやって様子を見ながら育てたというような経験をした人です。

次の49歳の例が、私です。私は24時間出勤をしなければいけない警察の専任担当、いわゆるサツ回りを初めてした世代です。夜中にルートというものが回ってきます。「火事が起きました」「交通事故が起きました」「誰々を逮捕しました」という電話を受けて回して、自分も取材に出ていく。警察担当ですと、二人か三人で回さなければいけないのですが、非常に体力の要る仕事でした。

夜中と朝の仕事が多くて、夜になって警察官が帰ってくるのを玄関先で待っていて話を聞く。そして、朝、出かける前に、「今日はどうですか」と聞きに行く。昼間は署内をまわるか、接触できないので寝ている。なかなか寝ることができませんが、車の中や記者クラブで平気で眠れるようになるという生活をしていました。体力的にきついので、女性向きではないとして配置されていなかった仕事ですが、私の時期になると、だんだんと他紙も女性が回るようになってできるようになりました。そういう経験をさせてもらいました。

そして、結婚して、恵那支局で一人勤務をしていたころ、子どもができました。「ここで産みたいので、かえなくてください」と会社に言いました。産休を取る間だけカバーしてもらうために、一部屋空けて、そこに若い子に無理やり住んでもらいました。そして、産休明けで、すぐ同じところに復帰しました。赤ちゃんにおっぱいをあげて取材に出ていきました。

働いている間、子どもはどうしているかといえば、夫もサラリーマンですので、夫のお母さんに同居してもらって、子どもの世話をしてもらいました。そのときは、夫のお母さんも「しょうがないね」と言って一緒に来てくれて、そのまま今も20年ぐらい一緒に住んでいます。その後、3カ所ほど引っ越ししましたが、好むと好まざるとにかかわらずついてきてもらって、家族の応援を得て続けるというかたちを取って今に至ります。

桜がきれいに咲いているときに、モデルが必要だけれど人がいないときには、おばあちゃんと子どもと一緒に車に乗せて、「そこに立っていて」と言って、写真を撮るといようなことにも付き合ってくれました。感謝しております。

その次は、今、同じ部署で働いている42歳の女性です。旦那さんが遠隔地の愛知県に勤務している人で、愛知県に家があるのですが、そこに住んでしまうと、自分が子どもを送り迎えしながら仕事をするができないということで、一時別居をして、実家やお姉さんの家に寄宿しながら、しばらくの間、働いていました。

お子さんが小学校にあがると同時に、愛知県の家に戻りまして、今はそこから2時間かけて通勤しています。「送り迎えがあるので、9時～5時しか働けません」という宣言をしました。それは当然のことですが、うちの会社は定時に終わることのできる会社ではないので、そのなかで5時に終わって迎へに行くという仕事の仕方をさせてもらうために、仕事の内容を頑張って考えています。幸い生活文化部という部署でもありますので、定期的に企画を書くことを課題として自分に課し、在宅医療の問題や児童虐待の問題、今は終末医療の問題をテーマに一生懸命にやっています。

そういう努力をしながら、ファイザー社が全国の新聞記事から選んで表彰する「ファイザー医学記事賞」に、彼女が一人でやった企画が取り上げられまして、外からご褒美をいただいたことがありました。会社のなかでも、記事が外から評価してもらえたことで再認識してもらったようなところもあります。

○司会 いずれも大変努力して働いてらっしゃる例ばかりで、私たちも頑張らなければいけない例ばかりですが……。40年前に育休を獲得されたということですが、当時は、ほぼ育休はなかったということですよ。

○箕浦 公務員の方が育休を取れるという法律が、ちょうどできたぐらいですね。民間企業で、しかも1年間を取れて、有給で。うちは放送もありますので、アナウンサーですとか、女性記者ですとか、その時期に何人もとってということで、当時は進んでいたと聞いております。

○司会 49歳の箕浦さん自身のことについてご説明が少なかったと思いますが、何か他にご苦労されていることなどはありますか。

○箕浦 私自身ですか。

○司会 ええ。

○箕浦 そうですね、自分のことはなかなか言えないですが、母に同居してもらっていますので、子どもの迎えはやってもらえますし、晩御飯も出してもらえます。晩御飯は朝私がつくるのですが、出す時間に帰ろうと思うと大変なので、「それはお願いしたい」ということを言ったわけではなく、なし崩し的にそうになりました。その分を朝しっかりやってから入社するということで、睡眠不足になることが、自分の喫緊の課題です。それでも、やはり仕事に出ていく喜びがあります。

○司会 それでは、箕浦さんよりかなり若い世代の働き方は、また少し違うかもしれないので、37歳の方の例をお願いします。

○箕浦 後輩になってくると、働き続けることに対するハードルが下がってきたのか、意識が変わってきたのか、そういう道をとってくれる子も増えてきました。

37歳の子は、旦那さんが公務員ですが、2回とも育休を何カ月か取ってくれました。

○司会 ご主人のほうが、育休を取られたということですね。

○箕浦 はい。本人も時期をずらして取るのですが、そういうふうに持っていけたらしいです。面白がってくれるというか、記者という仕事を一緒に楽しむというといけないのかもしれませんが、興味を持ってきているようなところは、時代も変わってきたなという感じがします。

皆さまが通常イメージされる記者は、カメラとペンを持って外に出ていく報道記者をイメージされると思いますが、整理部というレイアウトの部署でも「記者」といいます。私どもには報道記者と同じ数か、それ以上に整理部の記者がいます。

整理部では、出来上がった原稿に割り付けをして、レイアウトをして、見出しをつけます。新聞製作上、非常に大事な仕事です。取捨選択もしますし、原稿切りもしますし、写真も選びます。

私たちは素材を提供しますし、特ダネも出すつもりでやるのですが、結局、皆さまに見ていただくかたちにする仕事に、かなりの人的資源を使っています。

だいたい時間の流れでいくと、夜中の仕事になります。朝刊作業では、午後1時ごろに出勤して、遅い人は夜中2時、3時という勤務が通常になります。女性はその時間帯で仕事をしようと思うと、例えば、家庭を持って子育てをしながらというのは厳しいです。このところ、なかなか力を発揮するものですから、女性の配置も増えてきています。新人の配属でも半分ぐらいが、その部署に行っています。今、20歳代で三人の子が、その部署で出産をした子が育ってきています。

今までも幹部まで行っている子もいたのですが、結婚をしてやめてしまったりということで、なかなか続きませんでした。でも、若い子たちが出産をしても、地方版という一番早い時間にでき上る紙面の担当をしたり、朝早く来て夕方に終わるという勤務になるべくシフトしてもらって工夫をしながらやっています。

小さな会社ですので、特別な回し方もだんだんと少なくなってきて、一番新しい子では、地方版で、1時ごろ出勤してきて10時に終わるという勤務を、子どもを産んで復帰してやっている子がいます。ご家族の協力を得て、お子さんの世話をしてもらいながらということもあります。

この後、どのような働き方ができるのかは、会社も含めて相談しなければいけないところですが、職人技ですので、そこで身につけた力を発揮できないのはもったいないということで、新聞社によっては、昼間に前出しでつくっておくことのできる専門部署ができたりしていますので、これからの工夫していきたいということだと思います。

○司会 では、これからの岐阜新聞生活文化部の「ダイバーシティ」についてですが、多様な働き方を新聞社としても提案していけるというお話をお願いいたします。

○箕浦 生活文化部が担当している紙面は、「暮らし欄」や「文化欄」、部として直接はやっていないのですが、「特集面」など、その日の生ニュースではなく、先につくっておく、新聞の真ん中あたりにあるような紙面を幾つか担当しています。

「今日のニュースを明日の朝刊で」というように締めきりの早いものは、夜中の勤務になってきます

が、そうではないものは先につくることができます。1～2日前につくる「前出し面」と言いますが、そこであれば勤務に融通がききやすいので、会社のなかで生活文化部は、いろいろな事情を抱えた人が担当しやすい条件の部署です。

今、私が部長ですが、正社員の記者が二人います。そのうちの一人は、まだ保育所に預けているお子さんがいるという子育て中の人です。もう一人は、お母さんの介護をしながら働いている子がいます。

あとは、部の直接の所属ではありませんが、60歳を過ぎて65歳までの継続雇用の「シニアスタッフ」が二人、あとは仕事の増減によって特別に頼むOBのアルバイト、あと正社員ですが、手術などをしてフルタイムで勤務するのが厳しい病後療養中の人が、常に何人か関わっているという、それぞれ事情がいろいろとある人を組み合わせてやっている部署です。

問い合わせがあっても答えられないのはまずいですから、「この人、今日はいないよ」ということを知らせるための情報共有をしています。勤務の仕方を把握できるようにしてみたり、週に3日しかないなので、その間にやらなければいけないことをこちらでカバーするとか、この人は夜遅くまで引っ張るといけないので、先に帰ってもらって、その分を私がやるというように、パズルのように組み合わせてやっております。

特に、自分が子どもを二人育てて感じたことは、突発の事態があることがリスクであって、ネックになります。子どもが熱を出したときに、その仕事ができないから、そこを任せられないという、あまりないけれども、あったときに困るという事態は、いろいろな状況で起こり得るわけです。本気でカバーするつもりの人が一人いれば、可能性としては回っていくわけです。その本気度で、どのぐらいの体制がとれるかということだと思います。

うちの場合は、とりあえず私の子どもは大きくなりましたので、何かあったら、私が代わりに取材に行ける範囲でやるからと。それで組んでくれればよいということは伝えるようにしています。実際に、それでやるかどうかは別ですが、そういう考えの人がいるだけで、仕事の回し方もずいぶん違うと思います。

もう一つは、突発対応だけでなく全体量が多いと、短い勤務の人が短い時間で終わらないことがあります。パズルを埋めるピースのかたちは、それぞれ違うかもしれませんが、全体を埋められるだけのピースの数を確保することを考えて差配します。全体を見る役割の人が必要だということは思っています。

今まで、一人がフルにやっていたのとは違いますが、工夫すればやれると思います。「必要に迫られて」というところから始まるのですが、この5年ぐらい、このような体制でやっていて、それぞれがその気持ちでやれば、できる部分はずいぶんあるということを思っております。

○司会 ありがとうございます。普段、私たちがほとんど知らない新聞社の女性の働き方の例をいろいろと教えていただきました。

それでは、3番目に移らせていただきます。女性研究者の代表の一人ですが、稲葉カヨさんのお話を、記事（平成26年6月14日土曜『岐阜新聞』朝刊）を見ながら解説していただきたいと思います。よろしく願いいたします。

○箕浦 直接は書いていないのですが、同じく産休を取って、子育て中の記者が書いたものです。

稲葉カヨさんは、今回（平成28年11月）、紫綬褒章を受章されています。ご自身が今まで歩んでこられたなかで、大事だと強調しておられたのは、基本は本人の頑張りが大事であるということでした。当然ですが、頑張るなかで道が開ける。ただ、周りの人の協力が得られるように、周りの人との関わり方も大変大事であると。そして、アドバイスを受けたら、もう泣いてはいけないと。泣かずに感謝の気持ちを伝える。そういう強さを持つことだと。話を聞いた記者も非常に印象的だったと言っていたのは、「パートナー選びが大事だ。本当に分かち合って一緒に考えてくれる人が一人いることが大変大事だ」ということを実感としておっしゃっていたということでした。

自然科学系の研究者の先生方もいらっしゃると思いますが、自宅でできないこと、時間が一定かかるというところで難しさがあると聞いています。その意味では、先ほどお話した岐阜新聞社のようなカ

バーの仕方ですとか、他の人に代えられない研究だということでの難しさがあると思います。基本的に「意志あるところに」という気持ちの持ち方と、ご家族や周囲の方との関わり方が基本的に大事だということをおっしゃったところですよ。

○司会 ありがとうございます。それでは、残り時間が少しありますので、ポストイットに質問を書いていただいて、前のほうにいただきたいと思います。

(ポストイット回収)

○司会 それでは、よろしいでしょうか。

では、最初のご質問です。「女性が働き続けるという観点で見た場合、岐阜ならではの強みはあると思いますか。」

○箕浦 私ども、岐阜の地域性ということでは、東西文化の融合点ということで、定期的に企画をしたりしています。意外に開けているとか、三世同居率が多いとかありますが、このところでは女性管理職比率の少なさがナンバーワンでした。

有職率については、家内工業が盛んだったこともあって、ミシンを踏んだりとか、東濃のほうでは陶磁器の関係の内職仕事があったりということも含めて、比較的工作が多いところだとは思っています。組織のなかで表に立つとか、上にあがってというところまでいくと、非常に控えめなので、女性経営者もなかなか出ないという地域性については、いろいろ調べるところであります。

○司会 あまり強みではないということですね。

○箕浦 でも、家族といいますか、例えば、敷地内に家を建てて同居するという例は都市部よりも多いですし、知り合いの助力に頼りやすいところはあると思います。

保育所の待機数についても、まだ探している子たちも怒っていますので、かたち上ではゼロと言いつつ、決してゼロではないところがありますが、都市部よりは地域資源が豊かであるというメリットはあると思っています。

○司会 ありがとうございます。もう一つ、記者の仕事をする上で、女性であることの強みは何だと思えますか。また、苦勞をいとわず、箕浦さんが働き続けているモチベーションはありますか。

○箕浦 ありがとうございます。記者の仕事は非常に楽しいです。なぜかという、わかりやすいからです。自分が感動して伝えたいと思ったことを、記事にすることで読んでもらえる、読んでまた反応してもらえる。あわよくば紹介した人に感謝してもらえるという非常に面白い仕事だと思っています。

女性である強みといいますと、読者の半分は必ず女性です。生ニュースではなく、紙媒体が得意とするような解説であったり、取っておいてまた使うようなノウハウ物であったり、そういうものを必要としてくださるのは女性であることが多いです。

私ども生活文化部のメンバーは、例えば1面や社会面、切った張ったの事件ものに比べると、社内的にも格下に見られることが歴史的にはあったと思いますが、実は、紙媒体が皆さまのお役に立つものとして、結構、バカにできないのが献立とか、制度説明です。4月から制度が変わるから、こうしなければいけないというところを書けば、必ず読んでいただけます。生活に密着した素朴な興味といいますか、そういった部分で、生活者である、女性であることが強みになることは非常に多いと思っています。

○司会 ありがとうございます。他にもご質問いただきましたが、時間がありません。

それでは、最後にレジメに「これもありか」という面白いまとめの言葉が書かれていますが、まとめの一言をよろしく願いいたします。

○箕浦 女性研究者の方々は、どのような研究をして、どの時期にどのようなライフイベントを迎えて、というキャリアを自分で選べる職種だと思います。

新聞社の場合、特殊な話をあげたわけではなくて、それぞれにがむしゃらにいろいろな人を巻き込みながら、それぞれが全く違う働き方をしている、それもありがたしいと思います。自分は早く帰るのは苦手だ

けれども、こういうかたちでなら頑張れるということ、それぞれが考えてやっていけば、道は開けると思います。

私たちの経験から何かメッセージを伝えられるとしたら、こうあるべきだとか、こうしなければいけないということで、ご自分の生き方を狭めずに、柔軟にやっていただければいいなと思います。

○司会 どうもありがとうございました。少し時間をオーバーして申し訳ありません。では、これで連続フォーラムの2回目を終わらせていただきます。岐阜新聞生活文化部長の箕浦さんでした。どうもありがとうございました。

(終了)